

体験活動をとおして 青少年の自立を促進する ためのプログラム開発

National Institution For Youth Education

平成27年度
プログラム
開発事業

中部・北陸ブロック次長プロジェクト

-  国立能登青少年交流の家  国立乗鞍青少年交流の家  国立立山青少年自然の家
 国立若狭湾青少年自然の家  国立妙高青少年自然の家



National Institution For Youth Education
独立行政法人 国立青少年教育振興機構

あの青い空の下にはどんな景色があるのだろうか

どんな出会いが待っているのだろうか

昔おしえてもらった言葉がある

「早く行きたければ、一人で行きなさい」

「遠くに行きたければ、仲間と行きなさい」

あの遠くの青い空の下まで行ってみたい

一人で行くと諦めてしまうかもしれない

でも、仲間と一緒にだときっと大丈夫

体験活動をととして青少年の自立を 促進するためのプログラム開発

目次

青少年教育施設へのメッセージ

- 信州大学理事・副学長 平野 吉直 先生…………… 3
筑波大学体育系 教授 坂本 昭裕 先生…………… 4

プログラムのポイント

- 国立能登青少年交流の家「サイクリング キャンプ」…………… 7
国立乗鞍青少年交流の家「自然体験活動
ボランティアリーダー養成セミナー」…11
国立立山青少年自然の家「夏のチャレンジキャンプ in 立山」…15
国立若狭湾青少年自然の家「わかさわん うみはともだち
～幼児の海での体験と指導者養成を運動させて～」…19
国立妙高青少年自然の家「MYOKOチャレンジ2015
～この夏 見つける 輝く自分～」…23

研究の成果と課題……………27

事業を終えて……………29

プログラム開発事業の概要……………30

独立行政法人国立青少年教育振興機構
中部・北陸ブロック施設紹介……………裏表紙

国立青少年教育施設における実践的研究の必要性

信州大学 理事・副学長 平野 吉直 先生



私たちの社会は、豊かで便利な生活が保証されるようになった一方で、少子高齢化、経済格差、グローバル化、情報化といった急激な変化により、子どもたちから自然との触れ合い、屋外での活発な遊び、他者との親密な交流といった

体験的活動の機会を奪っています。私は、家庭裁判所と連携した非行少年のキャンプを15年ほど続けていますが、このキャンプに参加する少年を見ていても、現代社会の影響を強く受けていると感じます。他者と適切なコミュニケーションをとることができない少年、自信や自己効力感が欠けていると思われる少年、立ち止まって熟慮することが苦手な少年、うまく自己表現のできない少年など、今日の青少年の教育課題をそのまま背負っているように見受けられます。不登校、いじめ、児童虐待、非行、ネット依存など、青少年の教育上の問題は、ますます多様化・深刻

化し、これらの問題に関連した事件等の報道も後を絶ちません。

こうした状況の中で、国立青少年教育施設が連携して、課題を抱える青少年を対象とした体験活動の場を提供し、その成果報告をとりまとめたことは、時宜にかなった意義ある取り組みであり、高く評価したいと思います。青少年教育施設は、青少年の抱える問題を治療・矯正する専門機関ではありません。しかし、青少年教育施設には、家庭や学校にはない特色ある教育機能があります。それは、非日常という空間の中に、自然体験・生活体験・交流体験といった体験活動が総合的に組み込まれていることです。日常を離れ、普段とは異なる人と生活・交流し、自然を活用した新鮮な活動は、ストレスから解放し心身をリフレッシュさせるだけでなく、自分自身を見つめ直し、新たな自分を発見する機会となります。青少年教育施設の提供する体験活動には、課題を抱える青少年が成長する大いなる可能性が潜在していると思っています。

いろいろな世界の入り口を見せることができる体験活動を取り入れた教育が重要である

「現場の知」を積み重ねる

筑波大学体育系 教授 坂本 昭裕 先生



文部科学省の調査によれば、知的発達に遅れはないものの学習面又は、行動面で著しい困難を示すとされた児童生徒の割合は、6.5%であることが報告されています。つまり1クラスに2～3人程度のなんらかの困難を示す児童生徒が在籍することになります。これは

学校場面における数値ですが、社会教育施設などの体験活動の場においても課題を抱える青少年への指導、対応に苦慮するケースを耳にすることが多くなりました。今日では、このような青少年への適切な配慮を検討することは、あたりまえのことになってきています。

このような状況の中であって、これまで中部・北陸ブロックのプロジェクトにおいて児童生徒の問題の解決に資するためのプログラム開発に先導的に取り組んできたことは、高く評価されるものといえるのではないのでしょうか。プロジェクトを通して得られた多くの知見は、「現場の知

として発信され全国の青少年教育施設等で生かされることと思います。世の中には数多のプロジェクト報告がありますが、多くは数値的な成果のみ報告されているものばかりです。このような報告は、成果や効果を示すことにはわかりやすく有効かもしれませんが、指導の現場にはあまり役に立つものとはいえません。しかしながら、この報告書には成果や効果だけでなく、プログラム内容やその関わりのポイントあるいは、手立てなどの勘所が要所に記されており、現場において役立つものとなっています。それは、これまでの各施設における取組の積み重ねによって見出された知であるからこそ説得力をもつ有益なものとなっているのではないのでしょうか。長年にわたって行われてきたプロジェクトの「現場の知」は、社会教育施設において役立つだけでなく、わが国の小中学校やあらゆる青少年教育の現場においても生かされるものであると思われます。今後も益々、中部・北陸ブロックのプロジェクトの知見が積み重なることを期待しております。

体験活動は、青少年が抱える様々な課題の解決の一つのアプローチである

体験活動をととして青少年の自立を促進するためのプログラム開発

国立青少年教育施設中部・北陸ブロック5施設の提案



15ページ

夏の チャレンジキャンプin立山

児童養護施設と連携し、良好な人間関係づくりや、課題解決をととした満足感や達成感を味わわせることをととして、子供たちの自立を促進するプログラム。

国立立山青少年自然の家



7ページ

サイクリング キャンプ

児童養護施設と連携し、仲間とかかわりながら、普段ではできないダイナミックな活動に挑戦する2泊3日のチャレンジキャンプ。体験活動とふりかえりをととして、子供の自己肯定感と基本的な生活習慣の育成を図るプログラム。

国立能登青少年交流の家



19ページ

わかさわん うみはともだち ～幼児の海での体験と指導者養成を連動させて～

地元小浜市と連携して、小学校入学前の幼児が自然の素晴らしさ、生命の尊さを実感できるようにし、豊かな心をもつことをねらいとしたプログラム。

国立若狭湾青少年自然の家



11ページ

自然体験活動 ボランティアリーダー養成セミナー ～地域の小学校自然体験活動への参画～

自然体験活動の楽しさや喜びを伝えることができる青年の育成を図ることをねらいとしているプログラム。

国立乗鞍青少年交流の家



23ページ

MYOKOチャレンジ2015 ～この夏 見つける 輝く自分～

12泊13日で信越トレイル、火打山を踏破する長期キャンプ。
お互いに認め合い、高め合える集団の中で、個人の成長・自立を促すプログラム。

国立妙高青少年自然の家

児童養護施設との連携

国立能登青少年交流の家 National Noto Youth Friendship Center

サイクリング キャンプ



事業の概要

金沢市内の児童養護施設で過ごす子供12名を対象に、2泊3日のキャンプを実施した。昨年に引き続き2年目の事業である。

長距離サイクリングを中心としたダイナミックな活動を取り入れた本事業では、子供たちの自立の一助となることを願い、**自己肯定感**を高めること、**基本的生活習慣**や**公共マナー**を身に付けさせることをねらいとした。



実施期日 平成27年9月21日(月)～9月23日(水) 2泊3日
(宿泊地:国立能登青少年交流の家)

参加者数

	男子	女子	職員男性	職員女性
小2		1		
小3	1	1		
小5	2	1	2	5
小6	1			
中1		2		
中2	1			
高3		2		
合計	5	7	7	12

事業の日程

※表中略語等 OR…施設の使い方オリエンテーション MT…ミーティング、打ち合わせ
Cチーム…チャレンジチーム、体力に自信あり Gチーム…がんばるチーム、体力に自信なし
FT…フレッシュタイム (朝の集い、他団体との交流)

【1日目】

出発式	サイクリング①約48km 「施設から交流の家」 昼食弁当 9:00～15:00	OR	野外炊飯 カレーライス 16:00～19:00	ふりかえり 19:30～ 入浴 20:00～ 就寝 21:00～	スタッフ MT
-----	--	----	-------------------------------	---	------------

【2日目】

Cチーム	サイクリング②約40km 「交流の家から能登島」 道中で朝食弁当 6:30～11:30	昼食弁当	ガラス細工 20分	サイクリング③約40km 「能登島から交流の家」 13:00～16:15	休憩	夕食 食堂	ふりかえり (キャンドル) 19:30～20:30 入浴 20:30～ 就寝 21:30～	スタッフ MT
Gチーム	朝食弁当	サイクリング②約40km 「交流の家から能登島」 道中で朝食弁当 7:30～12:30	昼食弁当	ガラス細工 40分	貸切バス	休憩		

【3日目】

宿舎等清掃:FT	朝食食堂	いかだ体験活動 男子チーム 女子チーム 9:00～12:00	昼食食堂	ふりかえり アンケート 13:00～14:00	退所式
----------	------	---	------	-------------------------------	-----



自立を促すポイント

子供が自立していくために、まずは「**頑張っている自分(自己肯定感)**」を意識することが大切である。本事業では、子供自身がこの感覚をもつこと、**基本的生活習慣を身に付けること**を「自立を促すポイント」として、プログラムを工夫した。

Point1

仲間と共に、ダイナミックな活動に挑戦する

「金沢市～交流の家～能登島サイクリング」

初日の金沢市内から交流の家までの約48km移動のサイクリングと、2日目の交流の家から能登島までの約40km移動のサイクリングを実施する。しかし、小学校2年生から高校2年生までの異年齢集団であることから、ダイナミックな活動になるほど、一律の活動にするには無理がある。そこで、体力面を考慮して2つのグループ(チャレンジチーム、がんばるチーム)に分けるだけでなく、緊急車両2台(トラック、ワゴン車)を駆使し、適度に子供と自転車を搬送しながら、隊列が離れすぎないようにし、全ての**子供が達成感を味わえる**ようにした。



Point2

自分を表現し、互いに認め合う活動

～キャンドルを活用したふりかえり～

2日目のふりかえりは、ダイナミックなチャレンジが終了し、達成感を自己肯定感に高める、大切な機会と捉えた。特に、自分の気持ちを素直に表現することが苦手な子供に配慮し、ろうそくを灯しながらのふりかえりとする他、以下2点による雰囲気作りに努めた。

安心感を担保する

自分や仲間の頑張りについて言葉で伝え合う。その際、次の2の約束を設け、ゴールした喜びの奥にある、自らの学びについて**安心して考えを深め、達成感を自己肯定感に高めることへつながる**と考えた。

- ・発言を強制しない。(発言の自由を保障する、自己選択・自己決定)
- ・お互いの発言内容について批判しない。(全て肯定)

発言の価値付け

子供の言葉だけでは、深い思いまで伝えることは難しい。そこで、ファシリテーター(職員)が、子供の**発言に対して更なる価値付け**を行う。以下2点に留意した。

- ・実際のチャレンジの様子を具体的に伝え、子供の発言を裏付ける。
- ・同じ体験を経験した子供の発言は、似た内容になる傾向がある。従って、発言したことそのものや発言の順番、表情等、その子供なりの思いについてできるだけ取り上げ、一律の扱いにしない。

Point3

交流の家の使い方に関連付けて

基本的生活習慣や公共マナーについて考えるきっかけとなるよう、プログラムを工夫した。

- フレッシュタイムに参加し、**他団体との交流の場**を設け、あいさつを交わすよう促す。
- 時間にゆとりをもたせ、活動の後始末や宿舎の清掃を**十分に行う**。
- 公共の場を意識させ、「時間やマナーを守ることで、**お互いに気持ちよく使えるようになる**」ことについて、具体例を挙げて知らせる。



子供の姿 高校生A子の場合

キャンプ中の様子



初参加のA子は、2日目の夜、キャンドルふりかえりの際、「私は、昨年参加した仲間から『達成感ハンパないよ!』と聞き、参加することにしました。」と発言した。

がんばるチームに所属して参加している初日の様子からは、暗い表情が目立ち、楽しみながら取り組んでいるようには見えなかった。しかし、交流の家までの約48km走破、カレー作り体験、能登島までの約40km挑戦(これは、途中自動車に乗り、再度自転車走り出した。)、吹きガラス体験など、プログラムを重ねていくうちに表情や態度が和らぎ、明るくなっていった。

ふりかえりで、A子はこう続けた。「実際に参加してみると、初めは、疲れるばかりで、やだなあって思ったりもしたけど、ゴールの能登島ガラス工房に到着したとき、本当に達成感がすごい『ふわあ』てやってきて、本当に参加して良かったと思いました。」

事業後のアンケートに、「疲れたけど、みんなで協力し合って物を作ったり、活動したりするというのが、すごく楽しいなあと思いました。いろいろな体験もできてよかったです。最高の思い出になりました。」と綴った。A子は、事後アンケートで、自分が「成長した」と思う項目の全てに印を付けた。

すごいことをやり遂げたという**自信が自己肯定感に高まっている**様子がうかがえる。

調査結果と考察

事業の評価にかかわり、「成長している自分」と「生きる力」について、質問紙法による調査を実施した。調査の結果と考察は以下のとおりである。

成長している自分

子供自身が自らの成長についてどのように捉えているか知るため、事業終了時に、自分で「成長した」と思う項目を選ぶアンケート調査を実施した。

調査項目(右参照)は、キャンプ中の子供の姿をもとに職員が作成した。(複数回答可)

調査項目

- ①自信がついた
- ②きまりを守るようになった
- ③体力がついた
- ④あきらめないで頑張れるようになった
- ⑤何事にも挑戦したいと思う
- ⑥自分のことは自分でできるようになった
- ⑦人に感謝できるようになった
- ⑧友達のよいところを見つけられるようになった
- ⑨仲間を大切に思うようになった
- ⑩仲間と助け合いたいと思うようになった

調査結果と考察



全ての項目で半数以上の子供が成長したと感じている。

特に、1と6は、8割を超える子供が自分の成長を意識している。

このことから、本事業が、自己肯定感を高め、自立を促す事業であったことがうかがえる。

※左図の数値は、各項目で成長したと感じた子供数の全体(12名)に対する割合



生きる力の結果と考察

生きる力は、「子どもIKR評定用紙(簡易版)」を用いて評価した。

調査は事業の前後で実施し、その変容を平均値の推移から求めたところ、右図の結果となった。事業前後の得点に有意差は認められなかったが、5.3ポイントの向上が見られた。



キャンプ後の様子

キャンプ前後で大きく変容した子供の一人であるA子は、後日、施設職員に、「一日一日がすべて最高だった。達成感を味わえた。楽しかった。いい経験が出来た。」と語った。

このA子について、児童養護施設職員の児童指導員と心理療法担当職員が、キャンプ後、それぞれ次のように評価した。

児童指導員の見取り(事業参加)

A子は、キャンドルふりかえりの時、「やってみる」をこれからの目標に掲げた。園の生活に戻ってからもその心情を貫き、苦手なことに何度も挑戦している。今年、高校卒業を目の前に一番成長した。

心理療法担当職員の見取

A子は、初めて何かするときには、とても不安が高くなる。今回のキャンプでも、前日は不安が高かったようだが、サイクリングをとおして初めて経験することがたくさんあり、また、その経験した結果が良いものとなったことが、自信につながったのではないかとと思われる。その自信が、その後の生活場面で、様々なことに挑戦できる意欲につながっているのかもしれない。



まとめ



○能力別のチーム編成が有効であった

能力別の編成が、自分の力に合った目的や活動に対して、全力で取り組むことを可能にした。やりがいのある活動が、子供に達成感を味わわせ、自己肯定感を高めることにつながった。

○ゆったりとした雰囲気の中で行う「ふりかえり」が子供の学びを深める

自己表現が苦手な子供たちにとって、余裕のある時間配分だけでなく、何を言っても受け入れてもらえる、発言を強制されないという、ゆったりとした雰囲気が、自らの気づきを自覚し、仲間の気づきについてじっくりと考えることを可能にした。

○普段の生活を知る児童養護施設職員の見取りが

その後の子供の成長を支える

子供の自立を促すねらいは、一朝一夕には達成できない。普段から指導に当たる職員が子供の姿について適切に見取ることにより、今後の生活に生かせる。今後は、児童養護施設の子供の姿について見取る指標を、施設職員と協力して作成していきたい。

○「みんなの役に立っている」という感覚(自己有用感)の

醸成を目指したプログラムの改善が必要

野外炊飯やいかだ体験、生活体験において、他者とかかわりながら行う活動を意図的に仕組み、自己有用感が高まることを期待した。しかし、ふりかえりやアンケートで述べられた子供の気づきには、役立つ自分を意識した発言は見られなかった。今後は、実際に役立つ場面を的確に捉え、子供に意識させていく手立てや、役立つ場面を一層生み出す活動の工夫が求められる。

地域の小学校自然体験活動への参画

国立乗鞍青少年交流の家 National Norikura Youth Friendship Center

自然体験活動ボランティアリーダー養成セミナー

事業の概要

自然体験活動ボランティアリーダー養成セミナーは、自然体験活動の理論や技術を学習するとともに、小学校の自然体験活動プログラムの企画及びボランティア体験活動に参加することをとおして、子供たちに、自然体験活動の楽しさや喜びを伝えることができる青年の育成を図る事をねらいとしている。所定の講座を修了した参加者には法人ボランティアの資格を与えている。

全日程は6日間で実施しており、2日間の講義終了後は、高山市の全小学校において実施している3泊程度の自然体験活動「セカンドスクール(以下セカンド)」での活動支援ボランティアとして実習を行う。

野外炊事やネイチャーゲームの時間の指導を学校から任せられることもあり、自然体験活動ボランティアリーダー養成セミナー参加者(以下ボラ)は、子供たちに指導できるように、担当する学校の先生方と打ち合わせを行い、依頼いただいた内容に応じて、講義で習得した内容をもとにして、指導方法を繰り返し練習したり、指導で使う資料を準備したりして、指導当日を迎えることとなる。



事業の目的

事業は2回実施しており、1回目に参加するボラは、大学の単位の一部として参加する大学1年生が多く、2回目は、教育実習を終えた後の学生が主体となる。そのため、1回目のセミナーでは、技能の習得はもちろんのこと、子供と教員への対応を学ぶ必要がある。また、2回目に参加するボラは、教育実習や過去に青少年教育施設での指導経験を踏まえ、子供に自然の楽しさを実感させたい願いを抱いて参加することが多いことから専門的指導技術を学ぶことが必要となる。

さらに、セミナーに参加したボラがセカンドにて指導実践の場をもてることは、ボラにとっては社会で生き抜く力をつける絶好の機会となることから、乗鞍の職員は、青少年育成の観点に立ったプログラム構成と指導に心がけている。

プログラム内容

セミナー講義など

セカンドへの参画

	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00	23:00
1日目								受付 12:10~	開講式	【講義】 体験活動の意義と 青少年教育施設の 役割(機能) 1.5	入所 OR	夕食 入浴	【講義】 自然体験活動 リーダー・ボランティアに 求められるもの 0.5	【実習】 安全対策 と危険回避 2.0		翌日 準備	就寝
2日目	起床の つどい 朝食	起床の つどい 朝食	【講義】 発達段階に 応じた 体験活動の 必要性と 教育課程 1.5		【講義・実習】 ・野外炊事の 基礎技術と 指導法 2.0 ・安全対策 1.0			【講義・演習】 ボランティア活動の心構 えと青少年教育施設 における活動内容 [フィールド調査含む] (意義 1.0+理解 1.5)		夕べの つどい	夕食 入浴		【実習】 プログラム企画と 準備 2.0		翌日 準備	就寝	
3~5日目	起床の つどい 朝食	起床の つどい 朝食	開校式	セカンド	【実習】 プログラム 指導	昼食		【実習】 プログラム指導 (リーダー体験)	担任 との 打合せ	夕べの つどい	【実習】 児童の 生活指導 (夕食・入浴)		【実習】 プログラム指導 (リーダー体験)		【実習】 反省会	就寝	
6日目	起床の つどい 朝食	起床の つどい 朝食	【実習】 プログラム指導 (リーダー体験)	開校式	セカンド	昼食		ふり返り	閉講式								

自然体験活動ボランティアリーダー養成セミナー参加者の変容

(1) 全体の変容について

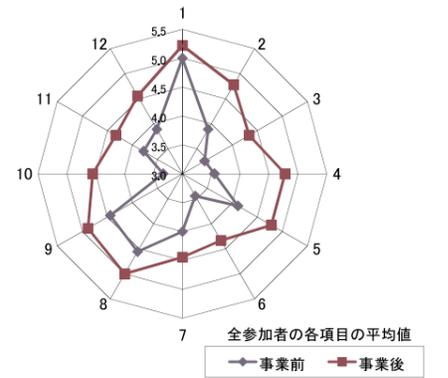
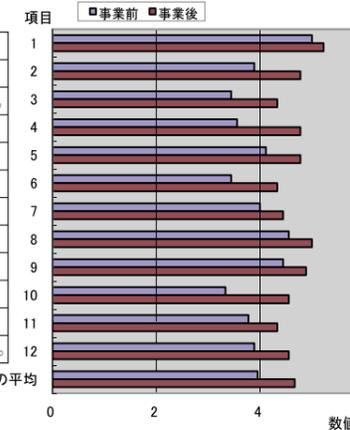
① 第1回セミナー参加ボラ対象調査から

第1回セミナーに参加するボラの多くが大学1・2年生であり、単位の取得を主たる目的としてセミナーに参加している。「意欲調査曲線」に見られるように最初の参加意欲が低い。しかし、「自己肯定意識尺度」項目2・3・4・6・10や「信頼尺度」項目1・2・4において実習後に大きな伸びを示している。これは、困難(個々の課題)を乗り越えやりきった充実感から、自分に自信がもて、周囲との調整力が高まった状況に至ったと考えられる。



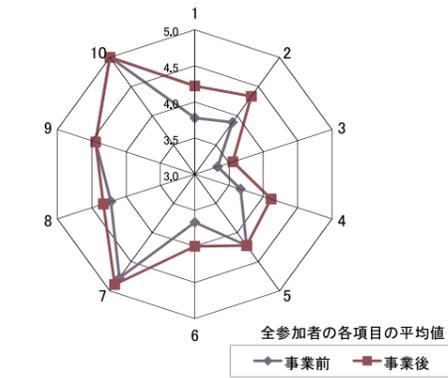
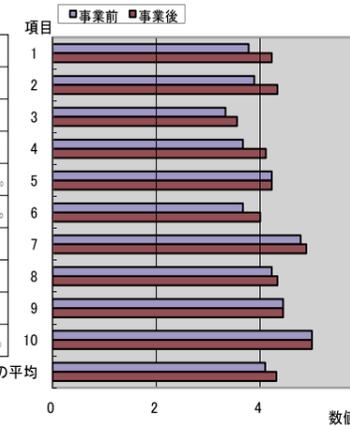
i) 自己肯定意識尺度

自己肯定意識尺度項目	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1 私には私なりの人生があつていいと思う。	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5
2 自分なりの個性を大切にしている。	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5
3 自分のよいところ悪いところありのままに認めることができる。	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5
4 前向きな姿勢で物事に取り組んでいる。	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5
5 自分のよい面を一生懸命伸ばそうとしている。	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5
6 情熱をもって何かに取り組んでいる。	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5
7 自分はのびのびと生きていると思う。	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5
8 充実感を感じる。	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5
9 生活がすごく楽しいと感じる。	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5
10 人前でもありのままの自分を出せる。	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5
11 自主的に友人に話しかけている。	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5
12 相手に気を配りながら自分の言いたいことを言うことができる。	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5

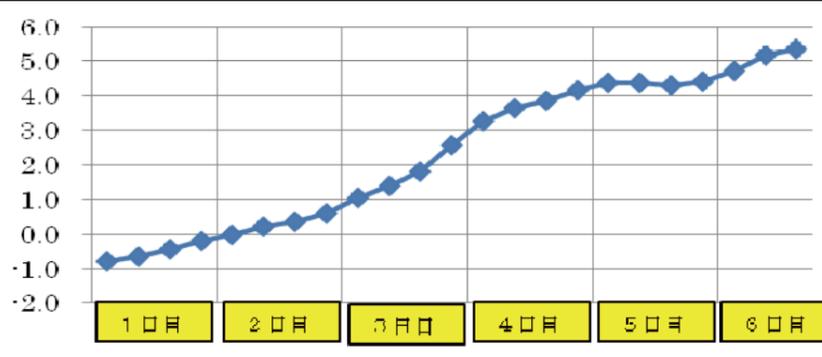


ii) 信頼感尺度

信頼感尺度項目	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
1 私は、自分自身をある程度信頼できる。	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5
2 私は自分の人生に対して、何とかやっていけそうな気がする。	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5
3 私は、自分自身が信頼するに値する人間だと思う。	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5
4 自分自身について、今は実現していないことでも、いつかこうなるだろうと信じられることは多い。	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5
5 私は、自分自身の行動をある程度はコントロールすることができるという確信をもっている。	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5
6 私は、決して他人にはとってかわることはできない存在であると思う。	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5
7 これまでに会ったほとんどの人は、私によくしてくれた。	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5
8 一般的に人間は、信頼できるものだと思う。	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5
9 これまでの経験から、他人もある程度は信頼できると感じる。	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5
10 状況が許せば、たいい人間は、お互いに正直に、かつ誠実に関わりたいと思っている。	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5



iii) 参加中の意欲調査曲線



6日間の参加意欲を
「最大値+6」「最低値-6」と設定し、ボラが自分の参加意欲がどのように変化をしていったのかをグラフ上に記録したものを数値化したものです。
☆第1回セミナーは3日目を準備日とし、4日目よりセカンドが実施された。

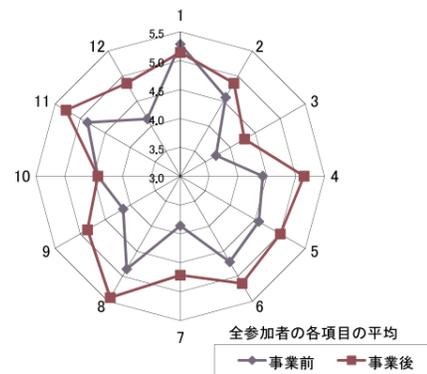
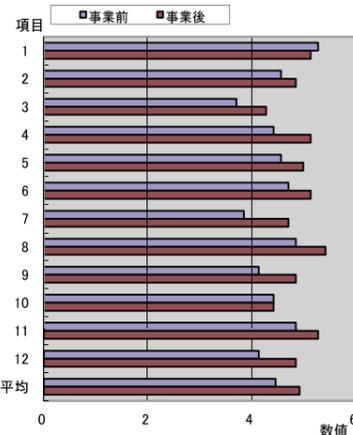
②第2回セミナー参加ボラ対象調査から

第2回セミナーでは、「意欲調査曲線」に見られるように最初の参加意欲が高い。これは、ボラの多くが大学3・4年生であり、これまでのボランティア経験や大学生活をとおして培った社会性が背景にあると考えられる。「自己肯定意識尺度」項目7・9・12や「信頼尺度」項目5・6において大きな伸びを示していることから、社会の中で自己が果たす役割と責任における自己有用感を実感できた状況に至ったと考えられる。また、「意欲調査曲線」3・4日目に見られるように、子供への指導場面での不確実性を不安に感じる様相が見られることから指導者としての意識の形成がされつつあると考えられる。



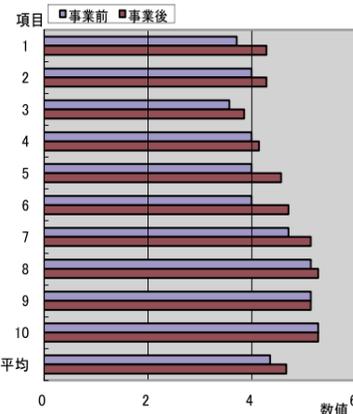
i) 自己肯定意識尺度

自己肯定意識尺度項目	自己肯定意識尺度項目
1	私には私なりの人生があていと思う。
2	自分なりの個性を大切にしている。
3	自分のよいところ悪いところありのままに認めることができる。
4	前向きな姿勢で物事に取り組んでいる。
5	自分のよい面を一生懸命伸ばそうとしている。
6	情熱をもって何かに取り組んでいる。
7	自分のはのびのびと生きていると思う。
8	充実感を感じる。
9	生活がすごく楽しいと感じる。
10	人前でもありのままの自分を出せる。
11	自主的に友人に話しかけている。
12	相手に気を配りながら自分の言いたいことを言うことができる。

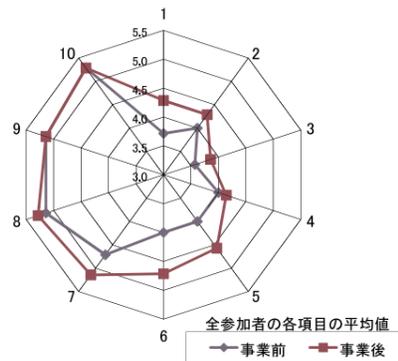


ii) 信頼感尺度

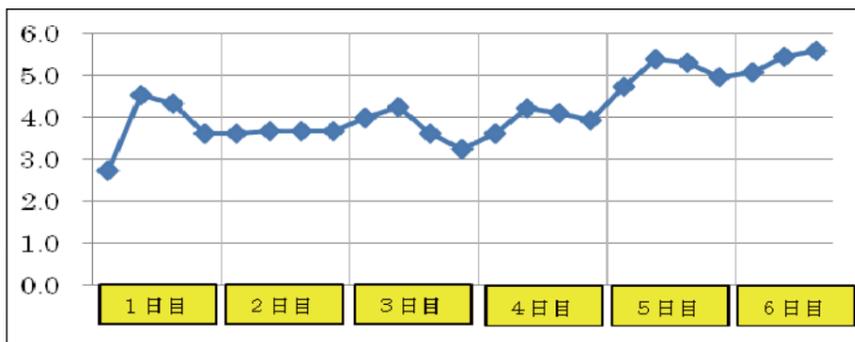
信頼感尺度項目	信頼感尺度項目
1	私は、自分自身をある程度信頼できる。
2	私は自分の人生に対して、何とかやっていけそうな気がする。
3	私は、自分自身が信頼するに値する人間だと思う。
4	自分自身について、今は実現していないことで、いつかやる気が削がれることは多い。
5	私は、自分自身の行動をある程度はコントロールすることができるという確信をわっている。
6	私は私で、決して他人にはとってかわることのできない存在であると思う。
7	これまでの出会ったほとんどの人は、私によくしてくれた。
8	一般的に人間は、信頼できるものだと思う。
9	これまでの経験から、他人もある程度は信頼できると感じる。
10	状況が許せば、たいい人間は、お互いに正直に、かつ誠実に関わりたいと思っている。



信頼感尺度の前後比較



iii) 参加中の意欲調査曲線



6日間の参加意欲を

「最大値+6」「最低値-6」と設定し、ボラが自分の参加意欲がどのように変化をしていったのかをグラフ上に記録したものを数値化したものです。
☆第2回セミナーは準備を2日目夜に行い、3日目よりセカンドが実施された。

(2) 参加中の意欲調査曲線からみる個の変容について

「意欲調査曲線」から2回のセミナーともに6日目には、参加したボラの参加意欲は最大値に近づいた。しかし、6日間の個々の意欲を分析してみるとさまざまな曲線がみえる。下記に示すのは4つの型である。学生たちからの聞き取り調査と照らし合わせながら見ると、一人一人の学生たちが個々の課題を乗り越えながら最終日を迎えたことがよくわかる。



i) 個の変容①「外的動機づけ参加型」



参加の動機は「連れてこられたから」であり、乗鞍の環境や初めての仲間に戸惑うことばかりで「帰りたい」と強く願っていたボラである。さらに4日目引率教員からの言葉に傷つき苦しんだ。しかし、子供たちが先輩ボラのもとに集まる光景を見たときの内的動機付けがされ目的意識が生まれた。「この子たちのために」と努力し最終日は子供からの感謝の言葉に涙が止まることはなかった。

ii) 個の変容②「責任意識型」



順調な右肩上がりのグラフである。このボラは昨年度法人ボラ登録をしており何度も乗鞍でのボランティアを経験している。しかし今回初めてボラチームのリーダーを務める不安からボラをまとめられるか不安の中でスタートしている。しかし、同期ボラに相談し解決法を導き出すことで周囲をまとめやり遂げた。最終日はその重責から解き放たれ涙ながらに感謝の言葉を伝えた。

iii) 個の変容③「指導不安型」



先輩に誘われ初めて参加したボラであったが、周囲の先輩に導かれ意欲的に取り組んだ。しかし、4日目にあるように不安を覚えた。それは、子供に安全を促すための自分の言動が「子供の心に伝わったのか」「違う指導の仕方があったのではないかと迷いが生じたためである。子供への指導は、子供の顔色をうかがって行うものでないことや伝え方があることを学んだ瞬間である。

iv) 個の変容④「協調不安型」



何度も事業に参加し、実績を積んできたボラである。講義を受ける中でも意欲がうかがえた。しかし、人見知りで内向的な性格であり、実習を進める中で社交性を身につける必要があることを認識した。その後、子供に自然の楽しさを実感させることの目的意識を他のボラと共有することで、協調性を高めることができ、自分の生き方への課題に正面から向き合うことができた。

まとめ



今回の調査研究から人と人が関わる場面で個々にボラの課題が生まれ解決を必要とすることが分かってきた。自然活動ボランティアリーダー養成セミナーに参加するボラには多くの人が関わる。セミナーの講師・セカンドに参加する子供と引率教員・ボラ・交流の家の職員である。中でも交流の家の職員が果たす役割は大きいと考えられ、来年度以降セミナーを実施するうえで、青年の社会性を磨くために、トラブルの顕在化と対応を交流の家職員が共有しておく必要がある。

- ①セカンドへの参画をイメージ化し内的動機付けを初期段階に実施。
 - ②ボラ間の交流が図れる機会の設定と個々のボラへの役割の明確化。
 - ③セカンド引率教員とボラが友好関係を築ける交流の家職員の支援体制。
 - ④ボラが指導する学習内容に対する支援の充実。
- 今後さらに個の変容を分析し、指導の充実に充てたいと考えている。



3つの児童養護施設との連携

国立立山青少年自然の家 National Tateyama Youth Outdoor Learning Center

夏のチャレンジキャンプ in 立山

事業の概要

富山県内には、様々な事情により親元を離れた生活を余儀なくされている子供たちのための社会福祉法人運営の児童養護施設として、「社会福祉法人富山市社会福祉事業団 富山市立愛育園」、「社会福祉法人 ルンビニ園」「社会福祉法人富山県西愛育会 高岡愛育園」の3施設がある。

国立立山青少年自然の家(この後、自然の家)では、平成26年8月29日に閣議決定された「子供の貧困対策に関する大綱について」に基づき、この3施設との連携を深める中で企画し、そこに在籍している子供一人ひとりの自己肯定感や自己有用感を向上させ、自立を促進することができる体験活動や、生活習慣の改善に繋がる多様な体験活動などを提供しようと、5つの事業を実施した。

ここでは、特に富山市立愛育園と連携した「夏のチャレンジキャンプ in 立山」を取り上げ、自立を促進するための体験活動について考察する。

事業のねらい

- 豊かな自然の中での、野外を中心とした体験活動に仲間と共に取り組むことを通して、豊かな情操の育成や協働の楽しさ・大切さへの実感を図るとともに、自己肯定感や自己有用感の向上を目指すことで、子供一人ひとりの自立の促進を図る。
- 集団生活や自然体験活動など、多様な体験を通して基本的な生活習慣を身に付け、将来、社会の一員として自立していくための基礎・基本を育む。

事業内容

「夏のチャレンジキャンプ in 立山」参加者 富山市立愛育園児10名(中学生7名、高校生3名)

	10:30	10:45	11:45	12:00	13:00	13:30	14:00	15:00	15:30	19:00	19:15	20:00	20:30	21:30	
1日目 8月24日	園出発	スーパーでの食材購入	到着	昼食	入所式	テント設営	クラフト マイスプーン	炊事説明	野外炊事 (夕食)	自由	ナイトハイイク	自由	入浴	自由	就寝

	6:30	7:00	8:30	9:30	9:45	13:45	14:00	14:30	15:00	15:30
2日目 8月25日	起床	野外炊事 (朝食)	テント片付け	自由	野外炊事(昼食)	自由	振り返り	退所式	所出発	園到着

自立を促すための手立て

富山市立愛育園へ、この自立支援キャンプの相談に伺った際、園職員から園のリーダーであり、近く社会に出なくてはならない中・高校生対象のキャンプにしたいという声が出た。そこで、相談を重ねる中で、今回のキャンプを「夏のチャレンジキャンプin立山」と名付け、自らが「住」や「食」を作り上げる活動を取り入れた中・高校生対象のキャンプとすることとした。

しかし、当初、事前訪問を行った際、自然の家職員の前に来た中・高校生の表情は硬く、中には話を聞いていない子供たちもあり、活動への意欲はあまり感じられなかった。

そこで、この子供たちにこのキャンプを通して自立を促進するために、

- ◆子供たちが自然の家職員と、そして子供たち同士で良好な人間関係をつくることのできるよう努める。
- ◆子供たちの実態に合わせて、特に「食」に関しての課題を設定し、それをグループで解決することを通して達成感や満足感を味わわせる。という点に重きを置くこととした。

◆良好な人間関係をつくる

①事前訪問を繰り返し、子供たちとかかわる機会を増やすことを通して、子供たちが進んで自然の家職員に声をかけたり、話に耳を傾けたりするような人間関係をつくれるよう努める

自然の家職員が事前訪問を繰り返し、自ら名前やキャンプ名前を告げたり、子供たちの顔や名前を覚え、声をかけたりすることから子供たちとの人間関係づくりは始まった。

そのようなかかわりを積み重ねる中で、キャンプ初日のスーパーマーケットでの買い物の際には、購入する食材などについて自然の家職員と自然に話し合うなど、打ち解け始める様子が見られるようになった。また、キャンプが始まり、一緒にテントを立てたり、クラフトをしたり、調理をしたりと活動が進む中で、子供たちの方から積極的に声を掛けてきたり、表情が和らいできたりする子供たちが増え、活動を楽しんでいる様子が見えるようになった。また、全体で話をする時も聞く姿勢ができるようになっていた。



②事前訪問での活動紹介などを通して、キャンプへの見通しや期待感をもたせ、共に活動する自然の家職員との一体感を育むよう努める

事前訪問の際には、子供たちとかかわるだけでなく、キャンプ当日子供たちが立てる予定のテントの写真を見せたり、野外炊事の際に使う調理用具なども持参し実際に触る機会を設けたりした。また、自然の家でキャンプのしおりを作成し、子供たちへ提示した。子供たちは、それらを基に少しずつキャンプへの見通しもち、キャンプへの期待感を高めていった。また、そのような機会を設けて、自分達と共にキャンプを楽しもうとしている自然の家職員に対して、安心や信頼を感じながらキャンプに取り組んでいった。



③子供たちが困っていても取って職員からは声かけをせず、子供自身や子供同士で問題を解決できるように見守ったり、適切な支援を工夫したりするよう努める

事前訪問などを通して、キャンプでの活動や自分たちで「食」などを作り上げることへの意欲を高めた子供たちであったが、年齢差や得意・不得意などもあり、意欲や能力面で個人差が見て取れた。

キャンプ当日、初めてのテント立てや自分達に任された野外炊事に最初は前向きであった子供たちも、活動が進むにつれ、仕事が見付からず、自然の家や園の職員に「何をすればいい」と問い掛ける子供も出てきた。それに対してそれぞれの職員は、「自分で何ができると思う」と問い返し、子供自身に考えさせるようにした。問い返された子供は最初戸惑っていたが、次第に自分で仕事を発見していったり、グループの仲間がその子供を活かそうと役割分担を提示したりするなどして、自分ができることを見付けていった。そのような過程を通して、子供たちは集団の中での自分の存在や役割を意識するとともに自己有用感を育んでいったようであった。園職員からは、「仲間と助け合い、気遣う姿が見られた」「自分たちで考え、工夫しながら活動していた」と、子供たちの新たな面への発見に驚き、喜ぶ声が聞かれた。



◆設定された課題を解決することを通して、満足感や達成感を味わわせる

①グループで3食(1日目夕食、2日目朝食・昼食)のメニューと、その食材の選定・購入を決める

子供たちは、職員から提示されたこの課題に対して期待と喜びを感じたようで、提示された後、早速グループごとにメニューや購入する食材について話し合う姿が見られた。中には、分からないことも本で調べて解決しようとするなど、意欲的な動きを見せる子供もいた。反面、園では「食」に対する子供たちの経験に偏りがあることも感じていた。そこで、園では自然の家職員と相談し、キャンプ前に子供たちをスーパーマーケットに連れて行き、事前調査ができるように図った。子供たちは、自分たちが食材の種類や価格に対し不勉強だったことを感じ、一生懸命にメモするとともに、園に帰ると改めてグループで話し合いをする姿が見られた。

当日、スーパーでの買い物では、グループ内で声をかけながら熱心に買い物をする姿が見られた。「小さいサイズにしようか」「まだ買えるよ」など、事前調査した際のメモを見ながら食材を選んだり、計算機を用いて予算内に収まるかを確認したりしながら、自分たちに任されているという自覚をもって買い物に取り組んでいった。中には、予定していた金額との誤差を90円に収め、計画的に買い物ができたことに、強い喜びと満足感を訴えるグループの姿も見られた。



②食事の際に使う、自分の「箸」「スプーン」「フォーク」を手作りする

自分たちで「食」を作り上げようと、買い込んできた食材を前に張り切る子供たち。そんな子供たちにとって、調理の前に自分たちの使う箸やフォーク、スプーンを作ること、「食」が食器や調理用具などの、道具にも支えてもらっていることに気付く良い機会となった。

時間をかけて作り上げた自分の箸やマイフォーク、マイスプーンを見て「こんなことも自分でできるんだ」という驚きや達成感とともに、この箸などを丁寧に扱おうとする気持ちや、今から使う調理用具等も作った人がいる、ということへの気付きに繋がった子供もいた。



③購入した食材は、3食で必ず使い切るよう各グループで工夫する

普段から調理をしない子供たちにとって、この課題の意味や難しさは、事前にはあまり感じる事ができていない課題であった。

ところが、野外炊事を進める中で、子供たちは食材がいつの間にか余ってしまっていくことに気付き始めた。それに気付いた子供たちは初めてこの課題の意味や難しさとともに、「食」を自分たちで作るというこのキャンプの意味も理解していった。

そんな難題に、当初は戸惑っていた子供たちであったが、グループで相談を重ねる中で、その余りを使ってメニューを増やしたり、翌日のメニューに再利用したりして課題を解決しようと努め、見事に食材を使い切った。

その中で子供たちは、工夫することの面白さや大切さに加え、みんなで考え、工夫し、取り組むことで、難しいと感じていたこともやり遂げることができる「協働」のよさに気付いたり、「やればできる自分」に気付き自己肯定感を高めていった。



評 価

○子供たちのアンケートより

- ・班のみんなと協力して野外炊事やスーパーでの買い物ができたのでよかったです。そして自分で箸やスプーンを作り、完成した時はすごく達成感がありました。
- ・いろいろな成長ができたと思います。
- ・みんなと一緒に料理することができてよかったです。
- ・ハードな日程で大変だったけど、スプーンや箸を作れて、とてもよい思い出になりました。
- ・テントを自分たちで立てて泊まるのは初めてだったので、上手くできるか分からなかったけどできてよかったです。ご飯も上手に作れてよかったです。
- ・テント立てや野外炊事でのことは忘れません。もう一度来たいです。
- ・来年は二泊三日のキャンプに挑戦したいです。

○園職員へのアンケートより

- ・火起こしや薪割りなど普段あまり体験できないことが新鮮で、子供たちもとても楽しんでいたと思う。自分たちでメニューを考え、食材を買い、調理することは大変だったと思うが、その少し「大変」ということが、達成感に繋がっていたように感じる。何より、子供たちが楽しみ、笑顔が多く見られたことがよかった。
- ・それぞれの班が、個人の能力に応じた役割分担ができていた。反面、自分がやらなくてはといった思いが空回りしていた子供も見られたが、責任感の強さが発揮された故で、仕方ないことかと思う。ただ、職員側が成果を求め過ぎて、子供たちの手に余るような活動や課題になってはいけないと感じた。今回はプログラム全てを職員側で計画したが、次回はプログラムの一部を子供たちと計画し、実行するといった手立ても取り入れてよいように思う。



結 果

- ・自然の家職員が事前訪問を重ねたり、キャンプで共に活動したりするなど、かかわる機会を増やすことで、子供たちは自然の家職員と仲良く一緒に活動したいと願い、自ら声をかけてきたり、話に進んで耳を傾けようとしたりするなど、良好な人間関係をつくることができた。
- ・子供たちは設定された課題や活動中に出てきた問題を、自分の力で解決したり、友達との協力を通して解決できたりしたことで、大きな達成感や満足感を味わうことができた。また、その過程で集団の中での自分の存在や役割を意識し自己有用感を育んだり、「やればできる自分」に気付き自己肯定感を高めたりすることができた。

考察(成果と課題)



- 自然の家職員が、年間を通じて連携する各園の園児とかわる機会をもち、良好な人間関係をつくる中で、各園を取り巻く環境の違いや園職員の思いや願いを知り、子供たち一人ひとりへの理解をより深めることは、この事業のねらい達成に向けての大切な基盤となる。
- 子供たちの実態に即した適切な課題を含んだ活動をプログラムに取り入れ、的確な指導・支援をすることで、子供たちは自ら課題を乗り越えたという満足感や達成感をもち、自己肯定感や自己有用感を向上させ、自立を促進することに繋げることができる。
- 子供たちの自立にとって多様な体験をすることがとても大切であることを改めて感じることができた。多様性を求める上で、各園独自では企画することが難しい、自然の家ならではの体験活動とは何かを探り出し、それをプログラムに組み入れることを考えていく必要がある。

体験活動をととして青少年の自立を促進するためのプログラム開発

国立若狭湾青少年自然の家 National Wakasawan Youth Outdoor Learning Center

わかさわん うみはともだち ~幼児の海での体験と指導者養成を連動させて~

事業の目的

幼稚園・保育所から小学校に入学する時期は、子供たちにとって新たな環境である学校に適応するという課題に向き合う時期でもある。しかし、小学校1年生において、先生の話听不懂、授業中に座ってられない、集団行動が取れないなど、学級での授業が成り立ちにくい状態が数か月にわたって継続する、いわゆる「小1プロブレム」とよばれる状況が散見されている。

2009（平成21）年4月から実施されている新しい幼稚園教育要領と保育所保育指針、2011（同23）年4月から実施されている小学校の学習指導要領では、小1プロブレムへの対応として、幼稚園・保育所・小学校の三者が連携することを明記している。特に小学校学習指導要領生活（1）改善の基本方針では、児童を取り巻く環境の変化を考慮し、安全教育を充実することや自然の素晴らしさ、生命の尊さを実感する学習活動を充実し、小学校における教科学習への円滑な接続のための指導を一層充実するとともに、幼児教育との連携を図り、異年齢での教育活動を一層推進することとしている。また、（2）改善の具体的事項（オ）では、児童が自らの成長を実感できるよう低学年の児童が幼児と一緒に学習活動を行うことなどに配慮するとともに、教師の相互交流を通じて、指導内容や指導方法について理解を深めることも重要であるとしている。

本事業では、上記学習指導要領の「自然へのかかわり」「幼児教育と連携」に着目した。そして、青少年が自然に触れる機会を提供することが当施設の特徴であることを鑑み、取り組むべき視点・目的を以下の2点に整理した。

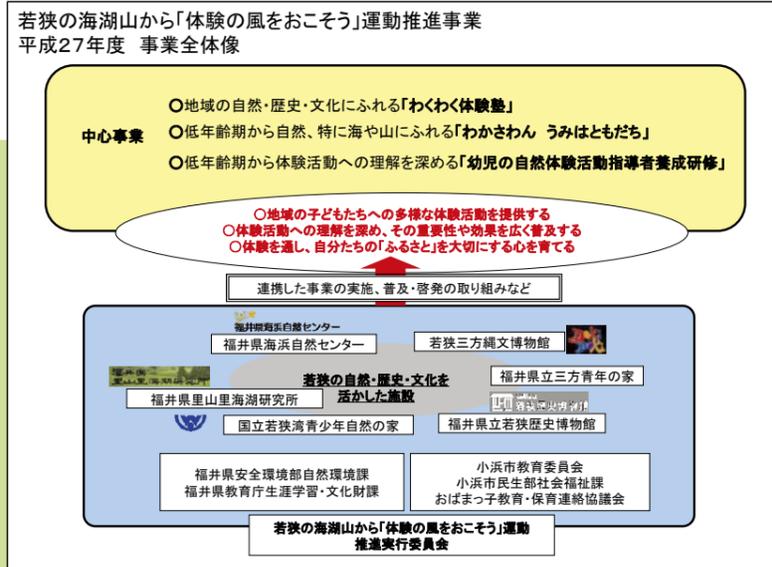
- ①小学校入学前の幼児が自然の素晴らしさ、生命の尊さを実感できるようにし、豊かな心を持って入学するよう促す機会を設定すること。
- ②幼児に関わる指導者自らが自然の素晴らしさ、生命の尊さを実感できる場を設定し、指導者自らの指導内容・方法を省みる機会を設定すること。

事業の概要

本年度より、福井県嶺南地域の青少年教育施設や関係団体が連携し、「若狭の海湖山から『体験の風をおこそう』運動推進実行委員会」を組織した。その事業として、小浜市にある保育園・幼稚園・子ども園と連携し、指導者対象の「幼児の自然体験活動指導者養成研修」と幼児（年長児）対象の「わかさわん うみはともだち」を実施した。

「幼児の自然体験活動指導者養成研修」では、シーカヤックや野外炊飯、スノーケリングなどとおして、幼児教育に携わる者自身が実際に自ら様々な体験することで、自然や体験活動に対する理解を深めることをねらいとした。

「わかさわん うみはともだち」では、砂浜遊びやハイキングなどとおして、幼児に自然とふれあう楽しさや面白さを知らせることをねらいとした。



幼児の自然体験活動指導者養成研修 平成27年7月31日(木)~8月1日(金)

	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00
7月31日(木)		受付	開講式	オリエンテーション	シーカヤックとスノーケリング	「自然体験活動」の技術	昼食休憩		シーカヤックとスノーケリング 海の生物について	「自然体験活動」の技術	アウトドア クッキングと焚き火	「自然体験活動」の技術	「幼児教育における体験活動」	入浴 就寝準備		就寝
8月1日(金)	起床	朝食		無人浜での 簡単クッキング	「自然体験活動」 シーカヤックでの 海の散歩と スノーケリング		昼食休憩	事業のまとめ		閉講式						

わかさわん うみはともだち 10月14日(水)、20日(火)、23日(金)

	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	
基本の日程	園出発		はじめての自然の家着	【海の活動】 磯遊び 磯観察 砂浜遊び 等	昼食 【持参弁当】	【山の活動】 ハイキング	(各園へ) 自然の家発 おわりの会

活動の実際

(1) 幼児の自然体験活動指導者養成研修

指導者自身が、「参加者」として海に思い切り入り、自然の素晴らしさや楽しさ、また怖さなどを体験し、自然に対する「原体験」を得られるきっかけを作ることをねらいとしてプログラムを立案した。プログラム策定にあたっては、当施設の元事業課長であり、「新しい公共」型の管理運営に向けた運営協議会委員で、小浜市内の子ども園々長をされている大森和良氏と連絡を密に取り、アドバイスを頂いた。また、講師にシーカヤック冒険家であるグランストリーム代表の大瀬志郎氏を招き、「シーカヤック」と「スノーケリング」で思う存分に海を感じようということで参加を募った。小浜市内の保育園・幼稚園を中心に事業の案内をし、小浜市の11園から14名の参加があった。また、ホームページなどで広く参加者も募り、小学校教員、幼児体育指導者なども参加し、計23名の研修となった。

アイスブレイキングとして、参加者が今感じていることを話し合った。「海に入ったことが少なく、泳げるか不安だ」「海は久しぶりで楽しみ」「参加者のみなさんといういろんな話をしたい」など、一人一人が思っていることを共有した。午前中は、ライフジャケットを着け、海に



ただただ漂った。海に漂いながら、その開放感と心地よさで、参加者同士の笑顔がたくさん見られ、海と関わる第一歩として非常によい時間となった。午後は、シーカヤックの基礎について大瀬氏から学び、小ツアーに出かけ、その先でスノーケリングをした。参加者も夢中になって海の中を見て、「こんなに綺麗な海だとは知らなかった」「たくさんの魚を久しぶりに見た」などの声が聞かれた。

夜には、野外炊飯で食事を作り、その後、焚き火を囲みながら、大森氏から子供たちと自然との関わる機会を作ることの大切さやその難しさ、大瀬氏からは海外でのシーカヤックの旅の話の聞き、参加者からは今日海や参加者同士と関わって思ったこと、感じたことを共有した。火を囲みながら屋外で、参加者同士が素直な言葉で話す場の雰囲気がとてもよく、一人一人が自然との関わりや、子供たちと関わっていくことについて、改めて考える機会となったようだ。

2日目は、当施設から南に30分くらいシーカヤックで漕いだ所にある無人浜「カタボコ浜」に行った。そこでは、スノーケリングをしながら、水中釣りをし、海の恵みもいただきながら、ゆったりとした夏の海の時間を過ごした。



(2)わかさわん うみはともだち

ふるさと小浜の海や山に幼児期から親しむことにより、子供たちが自然をより身近に感じ、自然とふれあう楽しさや面白さを感じてほしいと考え、プログラムを立案した。事前に小浜市の保育園・幼稚園・子ども園の園長会に説明を行い、趣旨の理解とともに自然体験についてのアンケートを実施し、その結果に基づいて、プログラムの微調整を行った。小浜市の保育園・幼稚園・子ども園は12園あり、年長児は241名いることから、3グループに分かれ、来所することとした。

有意義な活動となるために、以下の2点に留意して活動を進めた。1つ目は「場づくり」である。何かを設定したり、仕掛けを組んだりするのではなく、ありのままの国立若狭湾青少年自然の家の海や山を体験してもらうことが大切であると考え、流れ着いたゴミを拾う程度にとどめた。波が打ち寄せる砂浜、大きな砂場、木の実や落ち葉、枯れ枝の落ちている山道などをありのまま感じてもらおうこととした。2つ目は「安全の確保」である。海での活動では、子供たちが安心して遊べるために全員にライフジャケットの着用を義務付けた。また、陸上監視として6～7名の配置し、海上からボートで救助に行けるよう、桟橋で待機する人員を配置した。また、午後のハイキングでは、グループに職員やボランティアをつけて一緒に活動した。



評価と今後の検討課題

(1) 幼児の自然体験活動指導者養成研修における調査から

帰着後、参加者のふりかえりからは、「本当に久々にゆっくりと風を感じ、波の音を聞き、暗闇に目を凝らし、焚き火のゆらめきと暖かさを感じ、眠っていた懐かしい感覚が目覚めてくるようです。」「先生ではなく、一人の人間として、童心にかえて楽しめた。」などの声があった。

(2) わかさわん うみはともだちにおける描画分析から



利用前



利用後

靴を書いている絵から、裸足に変化している。また、波があったので、細かく描かれている。体験することで得た内容であると考えられる。

(3) 次年度へ向けての検討課題

指導者養成研修については、小浜市内の保育士、幼稚園教諭にさらに多くの体験を積んでもらうため、次年度も計画している。内容や時間配分を見直し、改善を図った上で継続的に実施していきたい。うみはともだちの事業についても指導者養成研修と同じく、次年度も計画している。保育園等の行事予定と整合性をもたせながら、実施時期などを見直して、実施していきたい。



まとめ

「自然へのかかわり」「幼児教育と連携」の視点から考えると、指導者、または小学校に入学していく年長児に自然体験をおして豊かな人間性を育むことができた。ただ、「小1プロブレム」への対応と考えると、実際の活動が小学校1年生に接続しているかつながりを見出せない部分があった。それよりも、幼児期に自然体験を多くもたせること、幼児に関わる保育士等が自らも多くの自然体験を積むことが、保育園等での活動に幅をもたせ、幼児教育の充実につながると考える。次年度以降、当施設の自然を大いに利用し、幼児教育の充実の一助になればと思う。

大学等専門研究機関との連携

国立妙高青少年自然の家 National Myoko Youth Outdoor Learning Center

MYOKOチャレンジ2015

～この夏 見つける 輝く自分～

事業の概要

「MYOKOチャレンジ2015 ～この夏 見つける 輝く自分～」は、「社会を生き抜く力」を育成するために実施した12泊13日の長期キャンプである。またこのキャンプは、一般募集の子供たちと、発達障害・いじめ・不登校など様々な課題を抱える子供たちが一緒に活動していく統合型のキャンプでもある。お互いに刺激し合い、高め合いながら活動することで、「集団を育てる」中で「個の成長を促していく」という指導の方向性をもってキャンプを実施した。

本事業では「社会を生き抜く力」を「自立」「協働」「感謝」として捉え、以下の3つのねらいを設定した。

- 普段の生活にはない、様々な困難な体験を乗り越えながら、諦めずに最後までやり抜く力を育成する。＜自立＞
- 仲間とともに支え合い、お互いに高め合いながら、活動することができる人間性を育む。また、仲間との活動を通して自分自身に誇りと自信をもつことができる。＜協働＞
- いつも身の回りにある環境のありがたさを、体験的に学ぶことができる。＜感謝＞

活動場所は、信越トレイル(全長約80km)と、妙高戸隠連山国立公園の一部である野尻湖・笹ヶ峰・火打山である。全国7都府県の小学校5年生から中学校2年生までの16名(男子12名、女子4名)が参加した。



活動内容

MYOKOチャレンジ2015 活動計画

	月	日	曜	6:00	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	入浴	洗濯	宿泊場所
出会うのステージ	1日	7	28	火						受付	開会式	出発	宿舎に到着後、準備活動			夕食				宿舎	×	中泉温泉
	2日	7	29	水	つどい	朝食	準備	信越トレイルチャレンジ① 天水山～深坂峠～野々海峠 (約5km)	昼食	野々海峠～須川峠～伏野峠 (約7.5km)	テント準備	夕食準備	夕食	振り返り						雪だるま温泉	○	雪だるま高原 キャンプ場 (テント泊)
	3日	7	30	木	つどい	朝食	準備	伏野峠～虹の池～宇津ノ根峠～立花山 (約5.5km)	昼食	立花山～牧峠～梨平峠～関田峠 (約6km)	移動	夕食準備	夕食	振り返り						施設で シャワー	○	光ヶ原高原 キャンプ場 (テント泊)
	4日	7	31	金	つどい	朝食	準備	昼食作り		移動・星のふるさと館での学習		入浴・移動	振り返り							山荘 京ヶ岳	○	光ヶ原高原 キャンプ場 (テント泊)
協力のステージ	5日	8	1	土	つどい	朝食	準備	信越トレイルチャレンジ② 光ヶ原キャンプ場～関田峠～鍋倉山 (約8km)	昼食	鍋倉山～小沢峠～仏ヶ峰登山 口 (約5.5km)	テント準備	入浴	夕食	振り返り					宿舎	○	四季の宿 かのえ	
	6日	8	2	日	つどい	朝食	準備	仏ヶ峰登山口～桂池～黒岩山 (約5km)	昼食	黒岩山～富倉峠～涌井 (約7.5km)	移動	入浴	夕食	振り返り					暁の湯	○	ふれあい広場 (テント泊)	
	7日	8	3	月	つどい	朝食	準備	ラフティングチャレンジ(信濃川)				入浴	夕食準備	夕食	振り返り					湯滝温泉	○	ふれあい広場 (テント泊)
自立のステージ	8日	8	4	火	つどい	朝食	準備	信越トレイルチャレンジ③ 涌井～毛無山～希望湖 (約6.5km)	昼食	希望湖～沼ノ原温泉～赤池 (約4km)	テント準備	夕食準備	夕食	振り返り						×	×	赤池テントサイト (テント泊)
	9日	8	5	水	つどい	朝食	準備	赤池～袴岳～万坂峠 (約5.5km)	昼食	万坂峠～斑尾山頂～登山口 (約5.5km)	移動 テント準備	夕食準備	夕食	振り返り						斑尾高原 ホテル	○	斑尾高原ホテル キャンプ場 (テント泊)
	10日	8	6	木	つどい	朝食	準備	片付け	移動	昼食	レイクチャレンジ(水上活動)	移動	テント準備	夕食	振り返り					キャンプ 場 シャワー	×	笹ヶ峰 キャンプ場 (テント泊)
挑戦のステージ	11日	8	7	金	つどい	朝食	登山チャレンジ準備			火打山チャレンジ① (笹ヶ峰～高谷池ヒュッテ)	テント準備	夕食準備	夕食	振り返り						×	×	高谷池ヒュッテ
	12日	8	8	土	つどい	朝食	準備			火打山チャレンジ② (高谷池ヒュッテ～火打山頂～高谷池ヒュッテ～笹ヶ峰)		入浴	ゴールパーティー	振り返り							○	自然の家 (テント泊)
	13日	8	9	日	つどい	朝食	後片付け			閉会式												

＜出会うのステージ＞ 4日間 7月28日(火)～7月31日(金)

(内 容)・信越トレイルのトレッキング、テント設営、野外炊事、星の学習

＜協力のステージ＞ 3日間 8月1日(土)～8月3日(月)

(内 容)・信越トレイルのトレッキング、ラフティング、テント設営、野外炊事

＜自立のステージ＞ 3日間 8月4日(火)～8月6日(木)

(内 容)・信越トレイルのトレッキング、バナナボート、テント設営、野外炊事

＜挑戦のステージ＞ 3日間 8月7日(金)～8月9日(日)

(内 容)・火打山登山、テント設営、野外炊事



自立のための手立て

今回のキャンプでは、子供たちの自立を促すために、以下のことを実施した。

①スタッフ研修を実施し、情報共有を図った。

子供たちの指導のあり方(カウンセリングマインド・発達障害の理解・子供理解の方法など)について研修し、スタッフ全員で指導方針について共通認識をもった上で子供たちを支援した。

このことにより、同じ方向性で子供たちの活動を支援することができた。スタッフ間の指導のずれもなく、子供たちはスムーズに活動に取り組むことができた。

また、参加した子供たちの個々の情報についてスタッフで共有し、支援の方法を確認した。

中には特別な支援や配慮が必要な子供もいたため、個々の特徴や対応についてスタッフ間で共通の認識をもった上でキャンプをスタートした。あらかじめ予測されたトラブルについてはスムーズに解決することができた。さらにスタッフで情報をもっていたために、余裕をもって対応でき、子供たちに自らトラブルを解決させることができた。



②お互いに認め合い、高め合えるような望ましい集団づくりに努めた。

スタッフは、様々な場面でそれぞれの良いところを見つけ、肯定的に評価することに努めた。そのことにより、あたたかい雰囲気を作ることができた。子供たちはそのあたたかい雰囲気の中で安心して活動することができた。

また、グループごとにまとめた話し合い活動を毎日行い、「グループのために必要なこと」「グループのために必要でないこと」を話し合い、自分たちでルールを作るという活動を行った。スタッフは話し合いをスムーズに進めるために、適宜介入した。キャンプの序盤はスタッフからの介入が多かったが、終わりに近づくにつれて、介入度は減少した。子供たち自身も、自分たちのことを自分たちで高めることができたという実感があつたと思われる。



③自立を促すプログラムをデザインした。

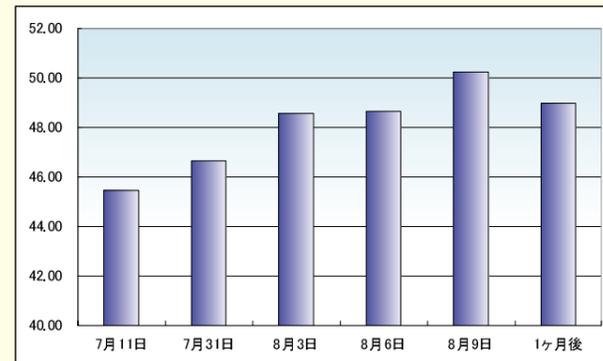
13日間を「出会い」「協力」「自立」「挑戦」の4つのステージで構成し、子供たちの「自立」「協働」「感謝」の気持ちを育成するプログラムをデザインした。また、テント泊と炊事を多く取り入れ、自分で行動しなければならぬ環境を整えた。子供たちはグループで協力しながら、「自分たちで」そして「自分で」できることが増えていった。



成 果

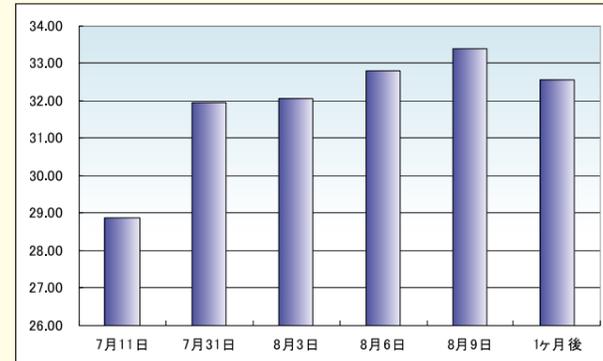
①全体の傾向(リーダーシップ測定尺度から)

課題達成機能(集団全体で何らかの目標を定めて、その目標に向かって成員を動機づけ、目標を達成させる機能)



*tp<.10 **p<.05 ***p<.01

集団維持機能(集団のメンバー同士のコミュニケーションを円滑にさせ、人間関係を良好にし、結束させる機能)



*tp<.10 **p<.05 ***p<.01

国立妙高青少年自然の家で開発した、リーダーシップアンケート(※)を活用して、参加者を評価した。全体的に、数値はキャンプが進むにつれて徐々に向上しており、課題達成機能の数値は、事前研修時から閉会式時に向けて有意に向上している。また、集団維持機能の数値は、事前研修時からそれぞれの調査時に向けて有意に向上している。

これらの結果から、今回のキャンプでは、「集団を育てる」ことができたといえる。さらに、望ましい集団活動により、個々の成長を促すことができた。事前にスタッフ研修を実施したこと、キャンプ中にスタッフミーティングを毎日行った上で、子供たちに指導支援を行ったことが、グループと個々に対して有効であったと考えられる。

(※)妙高青少年自然の家ホームページ - リンク - 事業成果 - 平成23年度の成果 - 少年期におけるリーダーシップの評価方法に関する調査研究

②個人の事例(Aさんの変化について)

<不安中のキャンプ序盤>

年齢や体力から考えて、Aさんが一番厳しいチャレンジになるのではないかと予想していた。スタート直後から足取りが不安定でペースが上がらず、「待って〜」「疲れたよ」「足が痛いよ」などのマイナス的な発言をしながら山道を歩く様子が見られた。グループの仲間も自分のことで精一杯で積極的な声かけはあまり見られなかった。

マイナス発言を繰り返す。仲間の関わりも少ない。

<徐々に認められるキャンプ中盤>

日が経つにつれ、徐々に仲間から認められるようになった。ノートに書かれているグループの仲間の感想から、その様子がうかがえる。

「はじめ、Aさんはグチばかり言って、よく疲れた〜とか言っていたけど、今日は黙々とがんばっていた。僕的にはAさんはとてもがんばっていたなあと思いました。」

「Aさんは歩くのが遅いので、励まそうと「がんばれ」「あと少し」と言ってあげました。そうしたら、歩くのが速くなってスイスイと歩いて行きました。一番昨日と今日で変わったのはAさんです。」

また、炊事の場面では、普段から家でご飯の手伝いをしていたAさんは、慣れた手つきで野菜を切ったり、鍋をびかびかに磨いたり、火の番を上手に行った。あまり経験のない仲間に、包丁の使い方や野菜の



切り方を教えていた。仲間やスタッフから、感謝されたり、賞賛されたりすることも多くなり、生き生きと活動する姿が見られるようになった。

活動への取組にも変化が出てきた。自ら進んで地図を持ち、仲間をリードする姿。下りが苦手な仲間に「次の足はここに置くといいよ」とアドバイスする姿。自分に自信を持ち、自分から様々な働きかけをするようになった。主体的な姿、自立した姿が徐々に見られるようになってきた。

仲間から認められ、自己肯定感が向上する。
主体的な姿も見られるようになる。

<トラブルを乗り越え、感動のキャンプ終盤>

ある日の夜のミーティングの時、大きなトラブルが発生する。話し合いが苦手なAさんは、ミーティングの場面でふざけることがたびたびあった。この日は、食事の片付けで自分に任された仕事をせず、自分がやりたかったかまどの片付けをしていたことも重なり、仲間から「わがままだ」と言われた。この瞬間からマイナス発言を繰り返し、ミーティングへの参加態度が一気に悪くなった。クールダウンが必要と判断したスタッフが、少し離れたところで話をしようと提案した。しかし、Aさんは「みんなと一緒にいい〜」と言って頑としてその場を動かなかった。自分の言動を見つめ直し、反省し、落ち込む様子が見られた。

翌日から、Aさんのミーティングへの参加態度は激変した。落ち着いて仲間の話を聞いたり、自分の意見を伝えたりするようになった。

これらのトラブルを乗り越え、最後のゴールに向かう時には強い気持ちをもっていった。本人のノートには次のように書かれていた。「地図を見てみんなでがんばりたい。やってからの達成感がうれしいから、100km踏破したい。」「十二曲りで登りが苦手だから、みんなを待たせないように速く歩きたいです。いつも朝、調子が悪いけど、明日は朝からがんばって行きたいです。」Aさんのノートには、仲間との関わりについてのコメントや前向きなコメントが多く書かれるようになった。

Aさんは、キャンプのねらいであった「自立」「協働」「感謝」を、13日間の自らの体験から学ぶことができた。閉会式では、「みんなと別れるのがいやだ…」と机に伏せて泣いているAさん。閉会式が終わっても涙が止まらなかった。

トラブルを克服した。仲間との絆を感じ、別れを惜しむ姿。

まとめ



○スタッフ研修を充実させたことが有効であった。

スタッフ全員で、子供たちの指導のあり方(カウンセリングマインド・発達障害の理解・子供理解の方法など)について研修し、スタッフ全員で指導方法に共通認識をもった上で子供たちを支援した。キャンプ全体の指導に一貫性があり、子供たちも混乱することなく、活動することができた。そして何より安心できる人間関係の中で、心を開き、ありのままの自分で仲間とコミュニケーションをとることができたので、日々の活動が充実していった。子供たちの充実した活動の中で、グループが成長し、子供たち個々にも大きく成長することができた。

○まとめの話し合い活動の充実を図ることで、子供たちの自立を促すことができた。

子供たちの変容を支えるために、日々の活動のまとめとなるグループごとの話し合い活動を重要視して実施した。「グループのために必要なこと」「グループのために必要でないこと」を話し合い、自分たちでルールを作っていくという活動を行った。スタッフは話し合いをスムーズに進めるために、適宜介入した。

このことにより、「自分たちで決めたことは、自分たちで守る」という意識で活動したため、自主的、主体的な姿が徐々に多く見られるようになり、子供たちの自立を促すことができた。

○同じ活動の繰り返しであっても、子供たちの心や行動は大きく成長することができた。

今回の活動フィールドは、信越トレイルと火打山であった。主に、トレッキング、登山といった「歩く」という活動が多かったため、子供たちが成長していく様子に不安があった。

しかし、子供たちの様子を観察すると、黙々と歩いている中で「自己を振り返る」ことができたり、仲間と話しながら歩くことで「仲間とのつながりを感じる」ことができたりしたようであった。また、キャンプの始めの頃の自分と、今の自分とを比較することができたので、自分で自分の成長を実感できたようである。それが、それぞれの子供にとって大きな自信につながったと考えられる。

研究の成果と課題

国立能登青少年交流の家

	自立を促進するプログラムのポイント	運営方法
	<ul style="list-style-type: none"> ●連携施設職員及び参加者の思いや願いを聞き取り、教育効果を高めるための手立てや安全面での配慮について提案しながら、共同でプログラムを作成していく。 ●自立を促すためのポイントとして、自己肯定感を高めることと基本的な生活習慣を身に付けさせることを掲げ、具体的にプログラムへ反映させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ●安全に配慮しながら、子供にとって魅力的、且つ困難な活動を取り入れる。 ●チーム毎に柔軟な対応が可能な支援体制を構築し、参加者の力量に応じたチーム編成をする。 ●自己肯定感を高めるため、参加者に合ったふりかえりの方法を工夫する。 ●参加者の思いに寄り添った事業運営となるよう、交流の家職員が共に活動し、参加者と苦労や感動を共有したり、時間に余裕をもたせたプログラム配置を心がけたりする。
成果と課題	<p>●成果： 全力を出して活動に取り組み達成感を味わうこと、味わった達成感等をふりかえりによって意識化すること、意識したことを言語化し他者からその学びを価値付けられることが、個々の自己肯定感の向上につながった。全ての参加者が達成感を味わうためには、個々の身体的能力を考慮してプログラムをデザインすることが求められる。事前に施設職員と打ち合わせ、能力別のチーム編成やプログラムの複雑化等、参加者の実態に合わせた活動を仕組むことで、参加者全員に達成感を味わわせることができた。</p> <p>●課題： 青少年の自立を促進するためには、自己肯定感の他、「自分はみんなの役に立っている」という感覚（自己有用感）も欠かせない。本事業では、仲間とかかわり合いを念頭におき、子供の自己有用感を高めるプログラムを取り入れた。しかし、自己有用感の高まりを意識させることと、それを見取ることに課題が残った。今後も養護施設等と連携して事業を展開する上で、子供の自立を量る評価指標の作成等、子供を見取る一層の工夫が求められる。</p>	

国立立山青少年自然の家

	自立を促進するプログラムのポイント	運営方法
	<ul style="list-style-type: none"> ●子供たちが自然の家職員と、そして子供同士で良好な人間関係をつくることができるよう努める。 ●子供たちの実態に合わせて課題を設定し、それをグループで解決することをとおして達成感や満足感を味わわせる。 ●良好な人間関係づくりや、課題解決を通じた満足感・達成感を味わわせることで、子供一人一人に自己肯定感や自己有用感を育み、自立を促進させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ●事前訪問を繰り返し、子供たちとかかわる機会を増やすことをとおして、子供たちが進んで自然の家職員に声をかけたり、話に耳を傾けたりするような人間関係をつくる。 ●事前訪問での活動紹介などをとおして、キャンプへの見通しや安心感をもたせ、自然の家職員との一体感を育む。 ●子供たちが困っていても取って職員からは声かけをせず、子供自身や子供同士で解決できるように見守ったり、適切な支援を工夫したりする。 ●子供たちに「食」に関する3つの課題を提示する。 <ol style="list-style-type: none"> ①グループで3食のメニューと、その食材の選定・購入を決める。 ②食事の際に使う、自分の「箸」「スプーン」「フォーク」を手作りする。 ③購入した食材は、3食で必ず使い切るよう各グループで工夫する。
成果と課題	<p>●自然の家職員が、年間を通じて連携する各園の職員や園児とかかわる機会をもち、良好な人間関係をつくる中で、各園を取り巻く環境の違いや園職員の思いや願いを知り、子供たち一人一人への理解をより深めることは、この事業のねらい達成に向けての大切な基盤となる。</p> <p>●子供たちの実態に即した適切な課題を含んだ活動をプログラムに取り入れ、的確な指導・支援をすることで、子供たちは自ら課題を乗り越えたという満足感や達成感をもち、自己肯定感や自己有用感を向上させ、自立を促進することに繋げることができる。</p> <p>●子供たちの自立にとって多様な体験をすることがとても大切であることを改めて感じることができた。多様さを求める上で、各園独自では企画することが難しい、自然の家ならではの体験活動とは何かを探り出し、それをプログラムに組み入れることを考えていく必要がある。</p>	

国立乗鞍青少年交流の家

	自立を促進するプログラムのポイント	運営方法
	<p>【考える】 事前に、子供たちと関わる上で必要な知識や理論を位置付ける。</p> <p>【仲間を知る】 ボランティアの仲間と一緒に楽しむことができる野外活動を位置付ける。</p> <p>【技能の習得】 基礎技術や指導法、安全対策を学ぶことができる実習や演習を位置付ける。</p> <p>【企画する】 学校のプログラムに対応できるように企画・準備の時間を位置付ける。</p> <p>【リーダー体験】 子どもたちを目の前にして主体的に活動できる場を位置付ける。</p> <p>【振り返り】 活動した後は、自分の姿を振り返る時間を位置付ける。</p>	<p>【考える】 外部講師を依頼し、2日間の講義を位置付ける。</p> <p>【仲間を知る】 初日の夜にボランティア仲間とキャンプファイヤーをおこなう。</p> <p>【技能の習得】 フィールド調査や野外炊事をする中で指導方法を学ぶ。</p> <p>【企画する】 学校側の要望をもとに、連絡を密にとりながら活動の企画や準備に取り組む。</p> <p>【リーダー体験】 企画・準備してきたことを子供たちの前で実践する。</p> <p>【振り返り】 自分の姿を振り返るアンケートの記入や語り合う時間をとる。</p>
成果と課題	<p>【考える】 2日間にわたって学んだ知識や理論が、実際の活動の中で大変役に立っていた。</p> <p>【仲間を知る】 初日の夜、ボランティアの仲間と一緒にキャンプファイヤーをする中で自分の意識を確かめ、お互いの願いを共有することができていた。</p> <p>【技能の習得】 事前にフィールド調査や野外炊事を実施し技能を身につけることによって、自信をもって子供たちの前に立つことができていた。</p> <p>【企画する】 学校側の願いや子供たちに必要なことをイメージして、活動の企画や準備に取り組むことができていた。</p> <p>【リーダー体験】 企画・準備してきたことを子供たちの前で実際にチャレンジしていく中で、学生一人一人が自信をつけている様子がうかがえた。</p> <p>【振り返り】 自分の姿を振り返るためのアンケートに記入をしたり自分の思いをみんなの前で語ったりする中で、学生一人一人の不安をとりのぞき、前向きな姿で子供への指導をおこなうことができた。</p>	

国立若狭湾青少年自然の家

	自立を促進するプログラムのポイント	運営方法
	<ul style="list-style-type: none"> ●指導者自身が、「参加者」として海に思い切り入り、自然の素晴らしさや楽しさ、また怖さなどを体験し、自然に対する「原体験」を得られるきっかけを作る。 ●仕掛けを組むのではなく、ありのままの自然の家の海や山を体験してもらうことが大切であると考え、流れ着いたゴミを拾う程度の整備にとどめ、波が打ち寄せる砂浜、大きな砂場、木の実や落ち葉、枯れ枝の落ちている山道などをありのまま感じてもらう活動にした。 	<ul style="list-style-type: none"> ●福井県嶺南地域の青少年教育施設や関係団体が連携し、「若狭の海湖山から『体験の風をおこそう』運動推進実行委員会」を組織する。 ●小浜市にある保育園・幼稚園・子ども園と連携し、指導者対象の「幼児の自然体験活動指導者養成研修」と幼児（年長児）対象の「わかさわん うみはともだち」を実施する。
成果と課題	<p>●成果： ○幼児の自然体験活動指導者養成研修での参加者のふりかえりからは、「先生ではなく、一人の人間として、童心にかかえて楽しめた。」との声があった。個人が得た感動を素直に子供たちに伝えたいと感じさせ、一参加者として自然に触れるプログラムを提供することができた。</p> <p>○海のイメージを体験の前後で絵に描いてもらった中で、友達の数や波の描写などに変化が見られた。海での体験が幼児にとって強いインパクトを与えられたことは確かなことである。</p> <p>●課題： ○「小1プロブレム」への対応と考えると、実際の活動が小学校1年生に接続しているか、つながりを見出せない部分があった。</p> <p>○指導者養成事業については園の行事や研修などのこと、また、幼児の事業については海水温のことなどで、実施時期について、次年度以降見直しが必要と考えている。</p>	



国立青少年教育施設中部・北陸ブロック次長プロジェクト

平成27年度 プログラム開発事業

「体験活動をとおして青少年の自立を促進するためのプログラム開発」

国立妙高青少年自然の家

自立を促進するプログラムのポイント	運営方法
①スタッフ研修を実施し、情報共有を図った。 ②お互いに認め合い、高め合えるような望ましい集団づくりに努めた。 ③自立を促すプログラムをデザインした。	●子供たちの成長を支えるために、スタッフ全員で指導の方向性や方針などを共通理解する目的で、事前のスタッフ研修を実施した。また、毎日のスタッフミーティングを充実させ、個々の支援に当たった。 筑波大学坂本教授より帯同いただき、参加者へのカウンセリング、キャンプ全体のアドバイスをいただいた。 ●3グループで活動し、毎日グループごとにまとめた話し合いの時間をとり、グループや個々の成長を促すことができた。スタッフは肯定的な評価に努め、あたたかい雰囲気をつくることができた。活動を通して、お互いに認め合い、高め合えるような集団づくりを目指した。 ●13日間を4つのステージで構成し、子供たちの「自立」「協働」「感謝」の気持ちを育成するプログラムをデザインした。テント泊と炊事を多く取り入れ、自分で行動しなければならぬ環境を整えた。
成果と課題 ●成果：○スタッフ研修の質の向上を図ることができた。 スタッフ研修を充実させたことが、子供たちの活動を支え、グループの成長と個人の成長を促すことに大きな影響を及ぼすことが分かった。キャンプに先立ち、ボランティアも含めたスタッフ全員が、キャンプのねらいと指導の方針、参加者の情報の共有と具体的な指導支援の方法等について共通理解を図ったことで、プレのない支援をすることができた。 ○子供たちの自立を促す支援をすることができた。 一見単調な活動でも、ねらいやスタッフの支援の度合いを工夫することで、子供たちの自立を促すことができた。4つのステージから構成される今回のプログラムは、主に自分の足で歩くことが多かったが、「①出会い」「②協力」「③自立」「④挑戦」というようにステージの名前がねらいに直結していたことが子供たちにわかりやすく、スタッフも支援しやすかったと考えられる。 ●課題：○職員の資質能力の向上を、さらに図っていく。 野外活動の知識や技能やカウンセリングスキル等、長期キャンプの中で自然や子供たちに関わる上で必要な知識や技能をさらに向上させていく必要がある。複数の職員がスーパーバイザー的な視野をもっていることが、ナショナルセンターの職員として様々な場面で求められる。 ○今回のキャンプで得られた知見の普及と活用を図る。 今回のキャンプで得られた知見を、他の事業はもちろん、学校教育等に普及し、活用していかなければならない。キーワードとして、「スタッフの共通理解」「集団づくり」「子供の自立」が上げられる。子供たちが主体的に活動できる環境を整えることで、望ましい集団が作られ、その中で個々の成長が図られるということも、様々な教育活動にいかしていくことが求められる。	

事業を終えて

私たち国立青少年教育振興機構中部・北陸ブロックの5つの国立青少年教育施設は、有効な体験活動を提供し、自立した意欲あふれる青少年の育成を願っています。平成25年1月25日中央教育審議会答申では「体験活動は、ニート・引きこもり等の青少年が抱える様々な課題の解決の一つのアプローチとして、また、課題の未然防止のためにも有効である。特に、不登校などの課題を抱える子どもたちに対しては、楽しみながらいろいろな世界の入り口を見せることができる体験活動を取り入れた教育が重要である。個々の子どもの状況と発達段階を慎重に見極めた上で、こうした教育の機会を提供することにより、基本的なコミュニケーションや生活習慣を身に付けていくことができる。」と述べられています。平成26年12月22日の答申では「地域ぐるみで子供たちの9年間の学びを支える仕組みの重要性」について触れられています。本プログラム開発事業は、中部・北陸ブロックの5つの各施設がそれぞれの特色を活かし、様々な機関と連携しながら体験活動をとおして青少年の自立を促進するためのプログラムを開発・展開し、青少年の変容を質的・量的測定法や観察法の両面により明らかにするなど、プログラムの運営ポイントを整理したものです。この報告書が全国の実践に活用され、さらによりよいプログラムの開発につながることを願っています。

最後に、この事業に関しまして継続的に親身ご指導をいただきました、信州大学理事・副学長 平野吉直先生、筑波大学体育系教授 坂本昭裕先生に心より感謝申し上げます。

平成28年3月
 独立行政法人国立青少年教育振興機構
 中部・北陸ブロック次長プロジェクト事務局
 国立妙高青少年自然の家 次長 國府 修治

平成27年度プログラム開発事業 体験活動をとおして青少年の自立を促進するためのプログラム開発

■発行者/中部北陸ブロック次長プロジェクト

国立能登青少年交流の家・国立乗鞍青少年交流の家・国立立山青少年自然の家・国立若狭湾青少年自然の家・国立妙高青少年自然の家

■発行日/平成28年3月 ■印刷所/(株)第一印刷所

目的

課題を抱える青少年を対象とした自然体験活動や全ての青少年の自立を促進するための集団宿泊体験活動のプログラムを開発する。

さらに、その成果を全国の公立青少年教育施設及び国民に広く発信・普及する。

得ようとする成果

<求める成果>

○課題を抱える青少年を対象とした体験活動プログラムや全ての青少年の自立を促進するためのプログラムの展開。

○量的・質的効果検証方法を活用して、子どもたちの変容をとらえ、プログラムの有効性を検証する。

成果の普及・活用

本研究により開発したプログラムの実際や子どもの変容を報告書にまとめ、独立行政法人国立青少年教育振興機構中部・北陸ブロック5施設の教育事業並びに研修支援事業に生かすとともに、全国の国立青少年教育施設及び青少年に関係した機関が活用できる体験活動をとおして自立を促進するためのプログラム・手法などを具体的に示し、成果の普及と活用を図る。

研究機関

国立青少年教育施設中部・北陸ブロック次長プロジェクト
 国立能登青少年交流の家・国立乗鞍青少年交流の家
 国立若狭湾青少年自然の家・国立立山青少年自然の家
 国立妙高青少年自然の家(事務局)

研究期間

平成27年4月1日～平成28年3月31日

本プログラム開発事業の背景

(1) 国立青少年教育施設が実施する必要性

全ての子供・若者が健やかに成長し、自立活躍できる社会を目指した子供・若者育成支援推進大綱(H28.2.9)では、「困難を有する子ども・若者やその家族を支援する」として「困難な状況ごとの取組」を整理し、推進すべき内容を示している。そこでは、様々な事情で、健やかな成長を遂げていく上での困難を抱えたり、不利な立場に置かれたりしている青少年の成長を社会全体で支えていくことを求めている。

国立青少年教育施設が、豊かな体験活動をとおして、課題を抱える青少年の成長を支援するとともに、全ての青少年の自立を促進するために開発したプログラムや事業を実施する際の関係機関との連携の在り方を広く普及することは、国の施策を具体化するナショナルセンターとしての大切な役割の一つである。

(2) 長期的な計画と今年度の位置づけ

これまでに開発したプログラムを基に、子どもに身につけてほしい力を確実に伸ばすことができるようなプログラムの運営や、関係機関との連携及び成果の普及など新たな展開を図る。

指導者

信州大学 理事・副学長 平野 吉直 先生
 筑波大学 教授 坂本 昭裕 先生

担当者

国立能登青少年交流の家

次長 河 辺 誠 二
 企画指導専門職 西 裕 之
 企画指導専門職 水 澤 哲

国立乗鞍青少年交流の家

次長 山 川 忠 彦
 企画指導専門職 大 坪 重 紀

国立立山青少年自然の家

次長 平 井 正 俊
 主任企画指導専門職 小 島 秀 樹

国立若狭湾青少年自然の家

次長 奥 村 広 一
 企画指導専門職 入 矢 完

国立妙高青少年自然の家

次長 國 府 修 治
 企画指導専門職 近 藤 和 久

調査研究の計画

(1) 第1回企画会議・研修会

(研究テーマ・研究計画の検討)

会場：国立妙高青少年自然の家 5月13日～14日

○プログラム開発事業の計画検討

○「子供の見取りと変容尺度について」

講師：筑波大学体育系 教授 坂本 昭裕 先生

(2) 第2回企画会議・研修会

(対象事業の報告)

会場 国立能登青少年交流の家 10月28日～29日

○各施設で実施した事業の概要と成果の報告

○事業成果のまとめ方についての検討

○報告書作成計画の検討

(3) 第3回企画会議・研修会

(報告書の検討)

会場 国立立山青少年自然の家 2月11日～12日

○各施設で開発したプログラムの成果と課題の確認

○報告書原稿の推敲と校正

○平成28年度の事業及び全体計画の検討



国立能登青少年交流の家

〒925-8530 石川県羽咋市柴垣町14-5-6
TEL.0767-22-3121 <http://noto.niye.go.jp/>

能登半島の入口にあたる羽咋（はくい）市の、日本海を間近に臨み豊かな自然環境を持つ眉丈台地に位置する国立能登青少年交流の家は、青少年のステップアップ支援事業や里海、里山を活用した多彩な体験活動プログラムを提供しています。



国立乗鞍青少年交流の家

〒506-0815 岐阜県高山市岩井町913-13
TEL.0577-31-1011 <http://norikura.niye.go.jp/>

乗鞍岳（3,026m）の中腹、白樺林に囲まれた広大な飛騨乗鞍高原に位置する国立乗鞍青少年交流の家は、登山やスキー、高地トレーニングなど、標高1,510mを舞台とした自然体験活動や、青少年の社会性・コミュニケーション能力を育むプログラムの提供を行っています。



国立立山青少年自然の家

〒930-1407 富山県中新川郡立山町芦峯寺字前谷1
TEL.076-481-1321 <http://tateyama.niye.go.jp/>

立山連峰のふもと、不動平の丘陵地に位置する立山青少年自然の家は、より低年齢からの自然体験をモットーに、少年リーダー育成事業や小学校低学年・幼児を対象としたキャンプ事業、登山・星座学習といった研修支援プログラムの提供などを行っています。



国立若狭湾青少年自然の家

〒917-0198 福井県小浜市田島区大浜
TEL.0770-54-3100 <http://wakasawan.niye.go.jp/>

若狭国定公園の中央にある田島半島の一画に位置する若狭湾青少年自然の家は、リアス式海岸特有の美しさが目の前に広がる専用ビーチを有し、そこでスノーケリングやカッターなどの海洋活動ができます。ここから漁村の人々との触れ合い、世界の国々へと海の道が続いています。



国立妙高青少年自然の家

〒949-2235 新潟県妙高市大字関山6323-2
TEL.0255-82-4321 <http://myoko.niye.go.jp/>

上信越高原国立公園内の妙高山の山麓に位置する国立妙高青少年自然の家は、年間約13万人の利用者に大自然の中で質の高い人間関係能力を高めるプログラムや環境教育に対応したプログラムの提供を行っています。



National Institution For Youth Education

独立行政法人 国立青少年教育振興機構

■中部・北陸ブロック

国立能登青少年交流の家・国立乗鞍青少年交流の家・国立立山青少年自然の家
国立若狭湾青少年自然の家・国立妙高青少年自然の家